

条件の言い方

森田良行

I 思考と表現

われわれが何かを感じ何かを考え、さらには何かを希望して、それを他人に伝えたく思うとき、多くは言語表現によって伝達意欲を満たすものである。この場合、単純な事がらであれば、ただ1つの単語を言表するのみでも事足りる。「火事!」「危い!」等々、日常よく耳にする言葉がそれである。このいわゆる一語文による言表は、言語能力の未熟な幼児においてもしばしば見られる現象である。ところで、しだいに複雑な意志表現へと進むにしたがって、一語文から単文へ、単文からさらに複雑な複文へと進んで行く。そして、ついには個々の陳述の連鎖として幾つかの文の積み重ねによって表現していくということにもなるのである。このことは、複雑な思考は複雑な表現を要求するということを意味する。

ところで、日本語に不慣れな多くの外国人にとっては、複雑な表現形式はまだ学習段階にあるため、これを自由に駆使することはできない。彼等は複雑な思考を行ない、複雑な思想を持ちながら、これを正しく写し出すべを持たないという不満足な状態に置かれている。また、複雑な思想をも解し得る頭脳を持ちながら、複雑な内容を盛った日本語が解し得ぬというもどかしい立場に立たされている。この、思考力と言語能力との不均衡を解消するためには、複雑な文型を習得し、接続機能をもつ言葉とその用法に通達する以外に道はないのである。

II 接続法研究の問題点

いま「夏になった。」「とても暑い。」という2つの事からを言表しようと考えたとする。この場合、単に「夏だ。暑いね。」と言うだけでも、話し手の思考はいちおう伝達され得る。しかし、夏であるということと暑いということに対する話し手の判断は、正確に伝えられたとは言い難い。そこで、この2つの概念に対する話し手の判断をあらわす方法として、いろいろな言葉が用意される。ある者は「夏になって、暑い。」と言うであろうし、ある者は「夏になったし、暑いし……」と表現するであろう。またある場合には、この2つの判断の間に因果関係を感じて、「夏になったので暑い。」とか「夏になったから暑いね。」などと言うかもしれない。時には、「夏になった。だから暑い。」と接続詞を使ったりする。このように、同じ事象に対しても、話し手の主体的な判断に応じて種々な表現形式が選択され使用される。そして、それぞれの形式の間には、発話者の微妙な判断の相違や感情の違いが表わされているのである。このことは、日本語における接続機能について、次の諸点を明らかにして行く必要性を我々に教える。

1. 日本語においては接続機能を示す形式にどのようなものがあるか。
2. そのような諸形式によって示される接続機能は、意味面においてはどのような相違や種類があるのか。また、形式と意味との関係はどのようなになっているか。
3. 意味面から分類された各形式には、実際にはどのような語が所属し、どのような形で具体的に使用されているのか。
4. 接続機能にあずかる各語の間には、意味上または話し手の感情面で差違がありはしまいか。あるとすれば、実際にはどのような違いなのか。
5. 同じ接続を示す語が用いられていても、すべての場合がみな同じ意味や判断を示していると言えるかどうか。同じ語であっても、そこに意味の幅があるのではないか。
6. 接続語の種類によっては、前後の叙述における表現形態や使用語彙に適・不適が生じるのではなからうか。生じるとすれば、そこに何か法則性ないし規則性といったものが見られはしまいか。

おおよそ以上の6項目に問題はしぼられる。

III 条件の言い方と日本語教育

次に、いったい外国人は、接続機能、特に条件の言い方としてどのような点に困難を感じているかを考える。これには次の2点が挙げられる。

1. 表現者の側として、このような意味を表わす場合どの形式によつたらよいか? いま用いた条件形式が、自己のもつ感情を正しい日本語として表わしているかどうか?
2. 理解者の側として、この条件の言い方はどういう意味を表わすのか? 日本語には同じ2つの句を結合するにもいろいろの形式があるが、この言い方は他とどう違うのだろうか?

これらの点から、1. 日本語においては条件の言い方にきわめて類似した表現形式が種々存在すること。2. それらの間には微妙な感情の違いが存すること。3. ある場合にはそのいずれを用いても意味面で大差ないが、ある場合にはそのいずれかでなければならない点のあること。4. 条件や結果の表現形態によって、そこに用いられる条件形式に拘束が加えられる場合のあること、等が知られる。この弁別は、時として日本人ですら困難を感じるくらいなのである。

そこで、次に、日本語における代表的な条件の言い方について順次解説を加えてみようと思う。なお、今回は紙数のつごうで接続詞については触れ得なかった。解説を試みた形式は、現代の日本語における条件の言い方として特に重要であり、かつ日本語教育の立場から見ても見のがすことのできない問題点を含んだ形式、他形式の基礎となる基本形式に限った。(これらの派生形については、また別の機会に述べることにする。)

IV 「～と」の機能

「～と」には、平接「～て」とほぼ同じ機能をもつ場合がある。

○彼は電燈を消すと、すぐ目を閉じた。

「～と」には、このような動作の継続を表わす働きがあるが、これは非

条件接続である。「～と」が条件接続として用いられる場合は、

○希望者が多いと、バスも2台は必要になる。

○春が来ると、花が咲く。

のように、一方の条件が成立すると、他方の結果も自然発生的に成立する。函数関係にある因果関係を表わすことが多い。このような機能は「～ば」についても見られるのであって、筆者はかような接続形式を順接とは切り離して定接と呼んでいる。「～と」によって表わされる条件は、条件句によって示された状態において自動的に当然起こる事実、もしくはおのずと確定してしまう事実が後につづく定接を本来の姿とするのである。この場合、条件と結果とがともに現在形をとる点に注意したい。これを過去形「花が咲いた」とするためには「春が来たら」と条件形式を変えねばならぬし、「花が咲くだろう」とするには「春が来れば」と変えなければならない。

○きみがそう言うと、わたしもそんな気になる。(既定)

この例で結果句を「そんな気になった」と過去表現にするためには「きみがそう言ったら」と変えねばならぬ。また、

○そんなことを言うと、承知しませんよ。

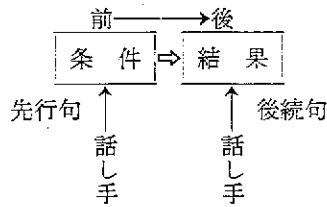
において、結果句を推量表現「承知しないだろう」と他者主体に変える場合にも、「言ったら…」「言えば…」とするほうが自然である。

○よく見ると、そんなに若い人でもなさそうだ。(既定)

これも「よく見たら……なかった」「よく見れば……ないだろう」と、条件形態を変えることによって、結果を過去表現もしくは推量表現に置きかえることのできる例である。「若い人でもなさそうだ」は推定表現ではあっても、現在の時点に立つ現実表現である。「……ないだろう」の想像表現とは根本的に相違する。このように「～と」によって示される条件結果の各表現がともに現在の時点においてなされている点に大きな特徴がある。

(右図参照)

○この道をしばらく行くと、右側に白い壁の家が見えてくるでしょう。の場合、「でしょう」は結果句のみに対する推量ととるよりは、全体に対するととるべきである。「～と」による叙述は、右図のごとく歴史的現在の形をとるところに特異性がある。



「～と」が現在形を要求することから、先行句に「だろうと...」「たと...」の未来形・過去形は現われない。また、後続句に「...と...たい」「...と...しょう」「...と...ほうがいい」「...と...てください」のような未確定な事実は現われにくいし、「...と...だろう」もめったに現われない。また、

- うちに帰ると、雨が降り出した。
- 部屋に戻ると、電話がなっていた。

のように、後続句に「た」が用いられている場合にも、現在の継続としてとらえてよいかと思う。しかも、上の例でもわかるように、「～と」の関係は、条件結果の間に時間的余裕をもたない、条件が成立すると同時に成立する結果、もしくはそれ以前から成立していた結果が続く。このような時間的間隔のない因果関係、観念的に現在の連続として密接する因果関係なのである。

- 来年のことを言うと、鬼が笑う。

これも、「来年のことを言う」という条件が、直ちに、しかも必然的に「鬼が笑う」という結果を招くことを示している。

- そんなことを言うと、あとでひどいめに会うぞ。
- 若いときにやっておくと、年をとってから役に立つものだ。

これらの例も、時間性を示す語句が用いられてはいるが、それは後続叙述内における時間性であって、「あとでひどいめに会う」「年をとってから役に立つ」という事実が、直ちに必然的に生じてくることにはかわりないのである。

○煮て食おうと焼いて食おうと、おれの勝手だ。

「～と」には、このような仮定逆接になる特殊用法のあることも付け加えておく。なお、この場合は必ず対比の形をとり、慣用的言いまわしとなる。

V 「～ば」の機能

「～ば」の中には、条件表現をなさない場合があるので注意せねばならぬ。

○この店はりんごもあれば、みかんもある。

これは「し」とほぼ同じ働きをなし、並列に用いられる。このような「～ば」を除外して、純然たる条件の言い方に関して考察を進める。

○風が吹けば、波が立つ。

この例に見られるように、「～ば」は筆者のいう定接を表わす場合がきわめて多い。「～ば」は本来時間的観念をもたず、しかも「～と」に比して具体性に乏しく、観念的想像による場合が多い。ただ客観的に条件結果の因果関係を示すのみなのである(右図参照)。そこには話し手の恣意性の入り込む余地がほとんどない。だから「春が来れば花が咲く」のような自然現象・天然現象を叙す場合とか、

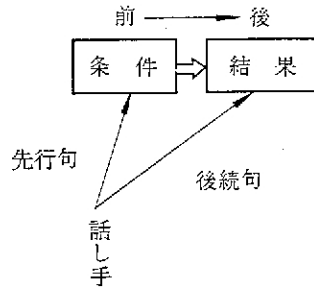
○田中さんが来れば、5人になる。

○2から1を引けば、1です。

のような論理・理屈の叙述に多く現われる。よく三段論法の譬えに用いられる

○風が吹けば、^{こけ}掃屋がもうかる。

も、論理性を表わす展開として「～ば」の用いられた例である。その他、



個人的表現を越えた、社会の所産ともいえることわざ・慣用句の類に「～ば」形式がきわめて多い。

○始めよければ、終りよし。○無理が通れば、道理ひっこむ。○犬も歩けば、棒に当たる。○るりもはりも、みがければ光る。○うわさをすれば、かげがさす。○三人寄れば、文珠もんじゆの知恵。○人をのろえば、穴2つ。○住めば都。○打てば響く。○勝てば官軍。○右と言えは左。

また、個別的事実を叙す場合にも、それが特定個人に対する描写の場合、「～ば」を用いると、個人の習慣・習性・特性といったものを表わすことになる。

○彼は机に向かえば、居ねむりを始める。

○ポチは主人を見れば、走ってくる。

これを「～と」に変えると、そのときだけの事実でしかなくなる点に注意したい。

○湯島通れば、思い出す。

これも「通ればいつも必ずきまって思い出すのだ」という話し手の習慣化した事態を表わす。流行歌にある

○あなたを待てば、雨が降る。

も、毎度雨が降るととるべきだろうか。このように、「～と」と「～ば」の違いは、「～と」が具体的事実を示すのに対し、「～ば」は本来観念的関係を表わす点にある。また、「～ば」は時間性を持たないから、「机に向かえば、居ねむりを始めた」とか「主人を見れば、走って来た」とか「……通れば、思い出した」とは言い得ない。その場合には「～たら」形式を用いる必要がある。

以上のように「～ば」は条件結果の因果関係を客観的に把握はらすることを本姿とするため、結果の句には話し手の主観や恣意よこしまが許されない。したがって、後続句に「…ほうがいい」や「…なければならぬ」「…てください」等の現われる可能性がはなはだ少ない。ただし、

○希望者が多ければ、バスを2台にしてください。

○ここまで来れば、もう $1^{\text{ひと}}$ 人で帰れると思います。

のような特殊例もある。このような例は、

○酒がなければ、ビールでもかまわないよ。

○そんなにおもしろければ、ぼくも読もう。

のように、形容詞や状態動詞「ある」「いる」などに付く場合に特によく現われるようである。その他「～ば」には、特殊用法として、「こそ」ともなった

○勉強すればこそ、あんなれたのだ。

のような言い方や、

○さらに言えば、東京は治療のほどこしようもない重病患者の都市ということになるでしょう。

のような言い方のあることも付け加えておこう。

VI 「～なら(ば)」の機能

「～なら」にも条件の言い方からはずれる例がある。

○あのことなら、もう形がついていますよ。(話題提示の機能)

○赤い花なら、まんじゅしゃげ。(話題限定の機能)

これらは「なら」に先立つ部分が句をなさぬ場合(陳述性がなく、全体で1の体言的資格となり、それに「なら」が添う場合)に生ずる。ただし、

○ぼくが鳥なら、飛んで帰るんだが。

のように「鳥デアルナラ」と置きかえられるものは、体言に付いても話題提示や限定ではない。これらを抜かして、純然たる条件表現をなす場合を考察すると、「～たなら」は抜かす。

○会社をやめるくらいなら、死んだほうがまだ。

○先生のお宅へ伺うなら、これを持ってってください。

のように、事がらが生起し実現する場合を想定または伝聞して、それが実現する以前の時点に立って、話し手自身の事前にとるべき立場・行為・意志・意見等を示す(仮定)。また、

○きみがそんなことを言うなら、ぼくにも言いぶんがある。

のように、その条件が成立している現在、その状態において話し手のとるべき立場・意見・行為などを示す(既定)。この場合、条件句の主語は2・3人称をとり、相手もしくは第三者の行為の実現を話し手が想定ないし伝聞して自己の立場・行為・意見を決定する。それゆえ仮定・既定の2つの場合が生ずるが、一方、主語に話し手自身が来る場合には、

○もしぼくがやるなら、まずこっちから始めるな。

のように、仮定条件しか現われない。「～なら」によって導かれる結果は、その条件の実現に対してあらかじめとるべき行為・立場を示す。したがって、後続句における判断の主体は話し手自身のはずである。

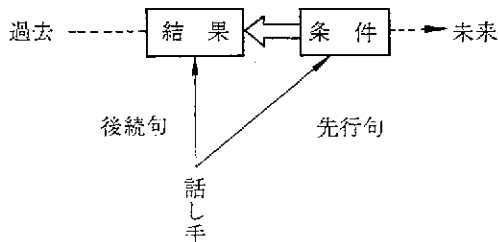
○もうじき電車が来るなら、警報機が鳴り出すはずだ。

話し手の判断は「～はずだ」で表わされる。「…鳴り出す。」と客観的に叙述することはできない。また、「～なら」は条件が実現する以前の時点に立ってなされる判断ゆえ、後続句に過去表現は現われない。

○雨が降るなら、かさを持って行きました。

とは絶対に言えない。

雨が降ることを事前に伝聞して、それが実現する以前の時点において、とるべき態度・行為・意見を後続句に述べる。(右図参照)



○大学生なら、そのくらいのことはわかっているはずだ。(既定)

○咲いた花なら、散るのは覚悟。(既定)

「体言+なら」のときは、「…である以上…は当然だ / …にちがいない / …は覚悟のうえだ」等の意を表わす。

○これがみんなダイヤモンドなら、どんなにすばらしいだろう。(仮定)
実現不可能な事ながらを空想する場合には、空想実現後の結果に対する判

漸をあらわす。

VII 「～たら(ば)」の機能

「～たら」は「～なら」とまったく反対の形式である。

○先生にあったら、よろしくお伝えください。(仮定)

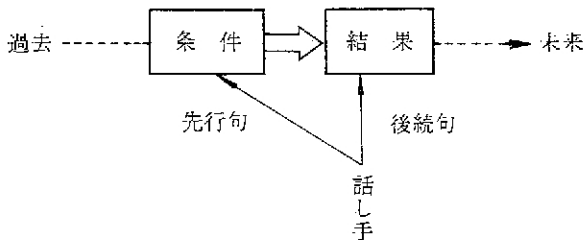
○昨日デパートへ行ったら、先生にあいましてね。(既定)

「～たら」は、事がらが起こってしまった場合を想定して、もしくはすでに生じた状態において、主題の人間や事物に起こった事がらや、その想定に対する話し手の立場・意見を叙述する。したがって「～たら」には後続句に意志・希望・勧誘・命令・許可等の表現を行なうことも許される。この点「～と」のような^上恣意性をさける条件とはいちじるしく性質を異にする。しかも、

○トンネルを出たら、雪がひどく積もっていた。

○先生のお宅へ伺たら、先生はおるすでした。

のように、条件によって引き出される結果は、偶然的要素をもつ。言ってみれば、その事実・事がらがどのような事情や場合のもとで起こったかをまず示し、その事実・事がらがただ後続するという展開形式である。このような形式を筆者は連接と呼んでいる。「～たら」によって提示される条件は、起こってしまった場合を顧みる立場、すなわち観念的過去の立場で



ある。この、条件が起こってしまった時と場に立って、話し手はそこに生起する事態を眺めるといふ表現機構をとる。「～たら」形式が条件に過去表

現をとっているのも、かような機構に由来するのである。「～たら」は他の諸形式にくらべ、きわめて個別的・具体的で、かつ自由・広範囲に用いられる。この形式は「…スレバ」という強い因果関係を示すのではなく、「…シタ、ソノトキニ」程度のかるい関係を示すにすぎない。一般的条件ではなく個別的条件を表わすのである。

VIII 「～ても、とも」の機能

この形式は、法則・習性として条件結果が恒久的にいつも伴う場合を表わすことが多い。

○ねこは暗くても平気です。

○雨が降っても風が吹いても、1日も休まない。

また慣用句として、異なる2者を対比させる形でも用いる。

○泣いても笑っても、あと1日だ。

○煮ても焼いても食えぬ。

前に来る品詞によって「～でも」「～も」ともなる。

○こんなに元気でも、そう長くは生きられまい。

「～ても」と同じく仮定逆接をなすものに「～とも、～と」がある。

○だれが何と言おうとも、気にかける人ではないだろう。

IX 「～から」の機能

○彼がそう言うから(に)は、よほどの自信があるにちがいない。

このような「～から」は、「以上は」と置きかえられるもので、必ず「は」または「には」を伴う。かような特殊例を除いて、ふつうに用いられる条件法の例について考える。

○あなたがそう言うから、みんな困っている。

○日が長いから、たすかります。

これらの「～から」は、「～ので」と置きかえられる場合である。かような置きかえのきく例を除くことにより、「～から」の特性がつかめてく

る。

○すぐ来るでしょうから、しばらくお待ちになってはいかがです。

○わたしもすぐ行くから、あっちで待っていてください。

上の2例は「～ので」で代行させることができない。そのわけは、条件または結果の句に未確定の事がらを含んでいるからである。このように、まだ確定していない事がらや、話し手の推量や、意志・願望・依頼等、主観的判断による叙述が来る場合は、「～から」を用いねばならない。「～から」は、後続句で述べる事がらが生ずるきっかけ・原因・根拠などを先行句で主観的にとらえ叙述する形式である。

○かえるが鳴くから帰ろ。

これは「かえるがもう鳴き出し始めたから帰ろう」の意であろうけれども、「いま帰らないとかえるが鳴き出してしまうから、急いで帰ろう」ともとれる。「～から」を用いている以上、「帰ろう」のきっかけとして、かえるが鳴くことを子供の主観によってとらえていると解すべきだろう。「かえるが鳴くので…」にすると、もっと客観的表現になってしまい、児童の夢がこわされてしまう。

「～から」を導く条件句は主観の認定ゆえ、確実性に乏しい場合でもこれを条件化することができる。「…だろうから」「…まいから」「…たいから」の言い方も可能なのである。また、「～から」によって導かれる結果の句も、主観の認定によって成立しうるため、「…から…しろ」「…から…しなさい」「…から…してください」「…から…してほしい」のような命令・依頼・推量・意志・質問等、まだその事がらが実現していない場合も可能なのである。このことは、裏を返せば、すでに実現してしまったことは「～から」の後続句にはなりにくいということである。「～から」の後続句には過去表現の現われることが少ない。

○きょうは寒いから、窓をしめましょう。

これを「しめました」とするには「～ので」を用いるほうが自然である。

○あしたは試験ですから、はやく寝ましょう。

これも、「寝ました」とするには「～ので」に変えたほうが不自然さがない。しかも、「...ですので」と言うよりは「...なので」と丁寧表現を除いたほうが自然に聞こえる。(この点に関しては、三尾砂氏が「話言葉の文法」でくわしい統計結果を示している。)これは、結びつけられる両句間の関係が「～から」と「～ので」とで相違することによる。「～から」の場合、条件結果の関係はともに話し手の主観によって認知された関係である。つまり本来別個のものである2つの事がらを、話し手が順次認識し、それを「原因—結果」の因果関係として主観的にとらえている形式である。したがって、両句間には表現過程の面ではっきりした切れ目が感じられ、丁寧表現の「です」「ます」もそのつど別個に付ける場合が多いのである。

最後に、「～から」には慣用表現として、

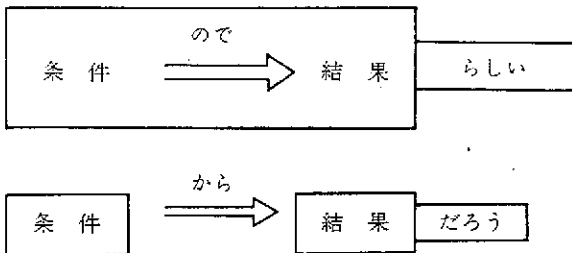
○お願いだから、やってくださいよ。

のような言い方もあることを加えておこう。

X 「～ので」の機能

「～ので」は「～のだ」と同様、はっきりした断定を行なう形式であり、確実性をもった条件を設定する。それゆえ話し手の主観以前にすでに存在する因果関係であり、それを全体で1つの事態として客観的にはあくし叙述する形式である。そこには途中で切れ目を感じさせない。「です」「ます」を文末に1つ置けば、それで全体が包容されてしまう。

「～ので」と「～から」の表現機構の相違を図によって示そう。



○金があるので遊びに行ったらしい。

○金があるから、遊びに行ったのだろう。

「～ので」は、「金がある」という確たる理由によって「遊びに行く」という結果が生じた。この理由結果の因果関係を「らしい」で推量する。一方「～から」の場合は、「遊びに行った」という確たる事実のよって来た原因を推定した結果、それは「金があるからだ」という話し手の判定が生じたことを叙述する。したがって「～から」によって示される関係は、しばしば順序を逆にして

○遊びに行ったのは、金があるからだろう。

のように表出される。

○さあ、おかしをあげましょう。お手伝いをしたからね。

○なぜ行かないって？ そのわけは、お金がないから。

このような文も、倒置の不自然さを感じさせない。「～ので」を用いるといかにも倒置文という感じを与えるのであるが。その他、「...なのは...だからです」「...なのは...だから」の言い方も条件の言い方の一種なのである。

「～ので」は確実な因果関係を客観的に把握し叙述する条件形式であるから、不確かな事や、話し手の心の状態は現われにくい。「...だろうので...」「...まいので」「...たいので」などふつつ言わない。その場合は「～から」を用いる。また、後続句に「...ので...しろ」のような「...しろ」「...なさい」「...てください」「...てほしい」「...しょう」等も現われることは少ない。このような制約からみて、「～ので」は本来「～から」に対応する関係ではなく、「～のだから / ～んだから」に対応する形なのだという説も生まれてくるのである。（「～から」に対応するのは、順接を表わす「～て」であるという人もいる。）

「～ので」の変形として「～で」の現われる場合がある。

○ちっとも知りませんで、失礼しました。

これは「知りませんので...」と等しい。このような完了後の言い訳を表

わす「～ので」は「～から」に置きかえることができない。また、慣用的な言い廻し「…というので」も「～から」に置きかえることはできない。

○僕だからというので遠慮するの^まか。(例解国語辞典)

最後に、「～ので」を用いていながら条件法をなさぬ言い方のある点を注意しておきたい。

○ただそう思ったので、別に他意はなかったんです。

かような「～ので」は「～のでして」に置きかえられるもので、反省法と言われる。これに「～から」を用いるときは「～からで」としなければならない。

○きみのために思ったからで、悪意があったわけじゃないんだ。

XI 「～けれど(も)、～が」の機能

この両者は機能・用法の点でさして違いが認められない。しいて言えば、前者が話しことば的、後者が書きことば的である。

○夏は日が長いけれど、冬は短い。

これは平接「～て」に近い用法である。

○わたしは田中ですけれど、あなたほどなたですか。

○彼とは初対面だが、なかなかしっかりした青年だ。

この場合は、両句間にまったく因果関係が見出せない。単なるつなぎであり、話題の転換である。このような形式を、単に形の上から逆接と判断することは危険である。筆者はこれを転接と呼んでいる。

「～けれども」「～が」は、前後両句の末尾に「～です、ます」を付けてもさほど不自然ではない。

○あなたはそうおっしゃいますけれど、わたくしはそうは思いませんよ。

つまり、この2者は表現機構の上で、順接の「～から」と全く同じなのである。「～から」の逆接は「～けれども」「～が」であり、「～ので」の逆接は次に述べる「～のに」である。「～けれども」「～が」も倒置文や省

略文を作ることの可能な形式である。

XII 「～のに」の機能

○まだ早いのに、もう帰るんですか。

○金もないのに、遊びに行ったらしい。

これらは「～ので」の逆接形で、客観的な因果関係を全体で1つの事実としてとらえ表現したものである。「～のに」が形容動詞に承接する場合は、「～なのに」「～だのに」の両形が用いられる。

○あんなにじよぶなのに(じょうぶだのに)、どうして病気になるかなったんだろう。

XIII む す び

一口に条件の言い方といっても、その種類と用法はきわめて多い。今回はその中で特に問題点の多い重要形式についてのみ解説を加えてみたのであるが、まだこのほかにも、～んなら、～たなら、～たんなら、～ていたなら、～ていたんなら、～ていたら等、派生形も多い。この点を見ても日本語の条件形式がかなり複雑であることに気付く。たとえば「～と、～ば、～なら、～たら」を例にとっても、その機能と使用範囲とは重なりとずれとが見られる。この場合、日本語教材の用例としては、他と重ならない、その形式のみのもつ機能と使用法の例、すなわち、その形式の特徴をもっともよく表わしている例が好ましいことは言うをまたない。そのためには、多少例文が長くなっても、場面ならびに条件結果の関係がよくわかるような例を数多く用意すべきだろう。時には一連の話として、1つの文脈の中に位置づけることによって、その特徴を浮き出させることも可能となる。学習者はそれらの用例を比較することにより、おのずと各形式のもつ機能の相違や用法の違い等を会得することができるはずである。本稿においては、ややくどいぐらい各形式のもつ表現機構の相違や機能の差を説いたが、決して、これをこのままの形で教室に持ち込むことを期待している

わけではない。むしろ教師の表面的な解説や他国語への便宜的な翻訳等は、時として誤った観念を学習者に植えつけ、事実をゆがめて解釈させる結果ともなりかねない。このようなあやまちを犯させないためにも、教授者の側が条件の言い方に対する正しい知識と正しい認識とを持つ必要があるのである。

*条件表現に関する参考文献を少し掲げておく。

湯沢幸吉郎「接続助詞法の用法」国語解釈創刊号（‘国語学論考’所収）

木下正俊「仮定条件法について」国語国文 13 の 5

阪倉篤義「条件表現の変遷」国語学 33

永野 賢「『から』と『ので』はどう違うか」国語と国文学 29 の 2

浅見 徹「カラとノデ」講座現代語 6 ‘口語文法の問題点’所収

宮島達夫「バとトとタラ」同上

北条淳子「条件の表わし方」日本語教育 4.5 号

その他、単行書で、特に参考となるものは、

三尾 砂「話言葉の文法(言葉遺篇)」(帝国教育会出版部)の 16.17「接続部における『です体』形」

三上 章「現代語法序説——シンタクスの試み——」(刀江書院)の第 4 章「接続助詞」

である。